慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	WAI技法を用いたself-imageの研究(1) : 内容分析(KJ法)による基準書の作成
Sub Title	A study of the self-image with the "WAI" technique (1) : construction of "kijunsho" through content analysis
Author	槇田, 仁(Makita, Hitoshi) 岩熊, 史朗(Iwakuma, Shiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1988
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.28 (1988.) ,p.61- 71
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000028-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

WAI 技法を用いた Self-Image の研究 (1)
——内容分析 (KJ 法) による基準書の作成——

A Study of the Self-Image with the "WAI" Technique (1)
—Construction of "KIJUNSHO" through Content Analysis—

槇　田　　仁
Hitoshi Makita
岩　熊　史　朗
Shiro Iwakuma

Historically, the concept of "ego" or "self" has played significant roles in psychology. However, many unsolved problems still remain, such as the confusion in concept itself, immaturity in assessment, disparity between the concept and the assessment. As a step to solve these problems, it is valuable to study self-images exploratory, because the self-image of an individual is his/her perception of "self". In this study, the subjects' self-images were collected with the "WAI" technique, and "KIJUNSHO", a system of categories for the self-images, was constructed. The first version of "KIJUNSHO" was constructed in 1983 with 1123 samples through content analysis. And up to 1986, 2145 data had been collected, and "KIJUNSHO" had been revised three times through the analyses of the aggregate data. The latest version of "KIJUNSHO" has 307 categories which are grouped into 9 major clusters. The analysis by using "KIJUNSHO" shows that the most frequent responses were obtained in the "Self" cluster and that the least number of responses were found in the "Ability" cluster. Responses to the clusters "Primary Group" and "Secondary Group" varied according to subjects' demographic attributes.

§1. はじめに

我々にとっての最大の関心事の一つは，我々自身の「自己」である。我々が我々自身の自己に対し非常に強い興味を感じているということは「根本的な心理学的事実である」と，William James (1892) は述べている。このような自己の重要性を考えれば，自我・自己は心理学にとっても重要な研究領域と言えるだろう。

にもかかわらず，心理学はこの問題に対しまだ十分な回答を提出できずにいる。それにはいくつかの理由があるようだ。まず第一に，自我や自己という概念が曖昧だということである。心理学者だけでなく，多くの哲学者が自我や自己についての理論を構築してきた。しかし，各々の研究者によって様々な理論化が行なわれ，自我・自己の概念についての完全なコンセンサスは得られていない。そのため，研究者の依拠する理論の違いによって，研究対象となる自我や自己が全く異なったものになってしまうこともある。

第二の理由は，自我・自己を経験的に扱う場合のデータ収集や測定が非常にむずかしいということである。心理学が経験科学として自我・自己の問題に取り組んでいく場合，データ収集や測定は不可欠である。しかし，目でみることも手で触ることもできない上に，概念も明確でない対象を経験的に扱うことは，決して容易なことではない。この問題に対し，実証的に自我・自己を研究している心理学者は，研究対象を自我や自己の非常に限定された側面にしぼることで対処してきた。self-esteem の研究などは，その中でも代表的なものと言えるだろう。しかし，self-esteem が自我・自己と呼ばれるものの全てでないことは言うまでもない。自我・自己の研究においては，より広い視点からのデータ収集が必要である。

そして第三の理由は，自我・自己の理論化と自我・自己についての経験的データの収集との関係が弱いということである。理論化とデータ収集が相補的な関係にあり，理論に基づいてデータ収集が行なわれ，データから理論の修正や新しい理論の導出が行なわれることが望ましい。ところが，自我・自己の研究においては，両者が相互に補いあって発展するという関係がまだ十分にできているとは言えない。そのため，心理学の他の領域に比べて，理論的研究と実証的研究が独立に行なわれる傾向が強い。

自我・自己研究にはこのような障害が残されているが，それをどのように克服して行ったらよいのだろうか。その解決策として，探索的に研究を進めて行くという方法があげられる。つまり，特定の理論に基づいて仮説検証型の研究を行なうのではなく，なるべく広くデータを収集し，その分析を通じて新しい理論の導出や既存の理論と経験的データとの比較検討を行なうのである。このように研究を進めて行けば，データ収集に先行する理論の影響を最小限に抑えることができ，各理論の持っている自我・自己についての特殊な概念にデータが制限されることもない。また，データ収集の方法を工夫すれば，かなり広く自我・自己を捉えることもできる。そして，このようにして得られた結果と既存の理論との比較検討を通じて，理論的な研究へのフィードバックも可能である。探索的な研究は，仮説検証的な研究に比べ，多くの時間や労力が必要であり，結果の分析・解釈も複雑になるという欠点もあるが，自我・自己の研究においては有効性が高いと言えるだろう。

§2. self-image 研究の技法

それでは自我・自己の探索的な研究では，具体的にどのようなものを研究対象とすればよいのだろうか。まず，言うまでもないが，データとして収集可能なものを対象としなくてはならない。そして，それは自我・自己の限定された側面ではなく，なるべく広い領域をカバーするようなものである必要がある。得られるデータが狭く限定されたものでは全体的な自我や自己に迫ることはできない。そういう意味では，個人の self-image を研究対象とすることが，自我・自己を広く捉える上で有効であろう。個人が自分自身の全てを知っているわけではないが，その個人の自己についてもっとも多くの情報を持っているのはその個人自身である。self-image とは，そのような個人によって捉えられた，その個人の自己そのものである。それ故，self-image には，自我・自己についての非常に多様な情報が含まれていることになる。しかも，そのような情報を言語的なデータとして収集可能だということも大きな利点である。

self-image を調べる技法としては，チェック・リスト法，Q 分類法，SD 法などのように研究者がなんらかの基準に従って予め項目を用意するものと，自由回答法を用いるものとがある。集計・分析の便では前者の方がはるかに優れているが，自我・自己を探索的に調べるという目的には，被験者が自由に反応できる後者の方が適している。なぜならば，項目を被験者に呈示するということが被験者の反応を制限することになり，被験者の持っている自我・自己に関する情報を損なうことになるからである。また，self-image には大きな個人差があると考えられることからも，自由回答法の方が有効と考えられる。

自由回答法の self-image 研究技法には，Bugental と Zelen (1950) の W-A-Y 技法，Kuhn と McPartland (1954) の WAI 技法 (20 答法)，そして McGuire と Padwer-Singer (1976) の "Tell Us about Yourself" テストなどがある。W-A-Y 技法は，「あなたは誰ですか？ (Who are you?)」という質問を被験者にして，それに対する 3 通りの回答を求めるというものである。WAI 技法は，「私は誰でしょう？ (Who am I?)」という質問に対する20通りの回答を被験者に書かせるものである。"Tell Us about Yourself" テストは，「あなた自身のことを私たちに教えて下さい。」という教示を被験者に与えて，答数に制限を設けず，7 分間紙に書かせるか，あるいは 5 分間話させてそれを録音するというものである。これらの方法はかなり類似している。しかし，W-A-Y 技法は一人の被験者から得られる情報が少ないという欠点を持っている。また，"Tell Us about Yourself" テストは，録音を行なう場合，集団施行に向かないという欠点と，連続したかたちで反応が得られるので，分析の前に反応を適当な単位に分割しなければならないという欠点を持っている。一方，WAI 技法は被験者一人あたりの情報量も多く，集団に施行することも可能なので多量のデータを集めることができる。また，反応の分析単位も明確である。このような点で WAI 技法は他の方法よりも優れていると考えられる。

次に，このようにして得られたデータをどのように分析して行くかについて述べる。自由回答法を使った研究においては，反応をいくつかのカテゴリーに分類するというものが多い。カテゴリーの数は，少ないもので 2 個，多いもので 40 から 50 個程度である。アメリカでは，

McLaughlin (1967) や Gordon (1968) のカテゴリーが多く使われているが，これらはともに30のカテゴリーを持っている。しかし，self-image にはかなりの多様性があり，自我・自己の領域も非常に広いものと考えられるため，より詳細な分類が必要と思われる。

既存のカテゴリーにはもう一つ重大な問題点がある。それは，これらのカテゴリーの多くが何らかの理論や研究目的に従って，ア・プリオリに作られたものだということである。例えば，Gordon の場合は社会的同一性を中心とする4つのターゲットを決めてカテゴリーを作成しており，McLaughlin はカテゴリー作成のためのデータ収集を行なっているが，同時に Rogers の理論を参考にしている。このように，何らかの前提のもとに作られたものが，既存のカテゴリーには多い。しかし，自由回答法で得られたデータの利点を生かした探索的な研究を行なうには，ア・プリオリにカテゴリーを設定するよりも，反応の内容分析を通じてカテゴリーを作成する方が望ましい。なぜならば，内容分析によって得られたカテゴリーは分析の道具であると同時に，self-image，あるいは自我・自己とは何かということを示唆する分析結果でもあるからである。

以上のような理由から，著者らは WAI 技法を用いて self-image を収集し，その反応の内容分析を通じて分類カテゴリーの作成を試みることにした。

§3. データの収集と分類カテゴリーの作成

〔WAI 用紙の作成〕

WAI 技法によって self-image を収集するために WAI 用紙を作成した。これはB4版の紙を二つ折りにしたもので，1ページ目の上部に，氏名，性別，調査日時，生年月日，年齢，現住所，未婚・既婚，職業を記入する欄が設けられている。その下には，行頭に1から20の番号が付けられた空行があり，そこに被験者が「私は誰でしょう？」という問いに対する20通りの回答を記入し，特に自分らしいと思われる回答の番号に○を付けるようになっている。2ページ目には，各回答の主観的重要度，客観的重要度，長所-短所を被験者自身が評定するための3本のスケールが各行ごとに設けられている。その後，この WAI 用紙は改訂され，1ページ目には氏名等の記入欄と被験者へのインストラクション，2ページ目には20個の答えの記入欄がそれぞれ印刷され，評定スケールは取り除かれた。また，インストラクションを平易なものに書き改めた小学生用 WAI 用紙も作成された。

〔データの収集〕

作成された WAI 用紙を使って1978年からデータの収集が行なわれた。被験者は，高校生，大学生，会社員，主婦などが主である（§4. に詳述）。データの収集は，学生の場合は，主に授業時間を使って集団施行で行なわれたが，会社員や主婦などの場合は自宅で記入する方法をとった。1986年度までに収集されたデータ数は約2000である。なお，被験者に対するインストラクション（改訂版 WAI 用紙のもの）は以下の通りである。

「私は誰でしょう？」という問いに対し，あなたのことについて，20通りの異なる答えを右のページの1番から順に書いていってください。思いつくままに，自由に書いてください。

書き終ったら，1から20までの答えを見て，特に自分らしいと思われる答えの番号を○で囲んでください。○はいくつつけてもかまいません。

〔分類カテゴリーの作成及び改訂〕

1983年度に最初の分類カテゴリーである「1983年度版基準書」を作成した。以後毎年度改訂を行ない，1986年度には3回目の改訂を経てほぼ完成に至った。

1983年度版基準書は，1983年度までに得られたデータを KJ 法（川喜多，1967）による内容分析を行ない作成された。具体的な手続きは以下の通りである。

①1983年度までに収集された1123人分のデータから，年齢，性別に偏りのないように300人分のデータを抽出した。

②各データの20個の回答をそれぞれカードに書き写した。但し，回答が重文の場合は分割して2枚のカードに書き，各々のカードが単文になるようにした。

③300人分のカード（約6000枚）を100人分ずつ3つのグループにランダムに分け，各グループごとに KJ 法による内容分析を行なった。

④3つのグループの分析結果を比較検討し，3者にほとんど差がないことを確認した。

⑤分類カテゴリーとして使用できるように，内容分析の結果の整理を行なった。

以上のような手続きを経て作成された1983年度版基準書は，「大項目」，「中項目」，「小項目」という3つのレベルを持った階層構造になっている。つまり，1つの大項目の下にいくつかの中項目があり，さらに各々の中項目の下により細かいカテゴリーである小項目が配置されている。大項目の数は10，中項目の数は334，小項目の数は1786である。表1が1983年度版基準書の概要である。この基準書は内容分析の第一次の整理の結果である

表 1　1983年度版基準書の概要

	大項目名	内　　容	中項目数	小項目数
1	帰属特性	性別，年齢，国籍，人種，名前，宗教などについての記述。	5	24
2	所属・役割	出身地，住所，未婚・既婚，職業，所属，役割，資格などについての記述。	12	69
3	対人関係	異性，友人，家族との関係についての記述，態度，感情。対人関係一般についての記述。	55	260
4	身体	体格，容姿，健康状態，体質などについての記述。	4	34
5	性格	自分の性格についての記述。	95	555
6	願望・主義・信条・生活態度	願望や欲求，生活信条，政治的な態度などについての記述。	32	181
7	趣味・嗜好・関心	趣味や事物についての好き嫌い，興味関心などに関する記述。	32	252
8	生活の記述	日常生活についての記述。所有物についての記述。過去や未来についての記述。	22	132
9	自己への評価・感情・能力，他者からの評価	自己評価や自己の能力に関する記述。他者からの評価についての記述。	67	229
10	その他	評価できないもの，無効回答など。	10	50
		計	334	1786

から，この基準書を用いて WAI 反応の評価を行ない，その結果を参考にして，さらに基準書を洗練して行くことになる。そのため，評価結果をもとに各カテゴリーの統廃合がスムーズに行なえるように，当初から小項目の純度に重点を置いた。そして，中項目・大項目は，“見易いように”，“無理のないように”という視点から配置を行なった。具体的には，類似したカテゴリー同志が集まるように便宜的に配置し，評価結果をもとにして各カテゴリーの改廃が行なえるように，極力，何らかの理論，仮説，予見が入らないように心がけた。1983年度版基準書の完成後，実際にこれを用いて，収集された 1123 人分のデータの分類評価と集計を行なった。

そして 1984 年度には前年度の結果に基づいて基準書の改訂を行なった。改訂は次のように行なわれた。まず小項目について，反応頻度の非常に少なかったカテゴリーを他のカテゴリーへ併合した。また，分類評価の際に区別しにくいカテゴリー同志も併合した。大項目については，次のような変更を行なった。《生活の記述》という大項目を，《所有》，《状況の記述》，《過去》という 3 つの大項目に分割し，《願望・主義・信条・生活態度》から《願望》を独立させた。また，《帰属特性》と《所属役割》は統合して《社会的属性》という大項目名とした。以上のような作業によって，カテゴリー数が減少し，各々のカテゴリーが以前より明確になった。そしてこのような改訂の結果を 1984 年度版基準書として 1984 年度の分類評価に用いた。なお，1983年度版基準書から 1986年度版基準書に至る大項目の変遷を図 1 に示す。

1985 年度版基準書の作成も 1984 年度と同じように前年度のデータの分析結果に基づいて行なわれた。まず，これまでの分析からおおよその反応傾向がわかったため，大項目，中項目，小項目という 3 つのレベルを大項目と小項目との 2 つのレベルに改めることにした。つまり，それまで中項目であったものを小項目とし，それまでの小項目は例示として，独立したカテゴリーとしては扱わないこととした。但し，小項目として大きくなり過ぎるものは分割して，各小項目のレベルがなるべく同じになるように調整を行なった。これによりカテゴリー数がさらに減少し，分類評価が容易になった。

その他に，大項目における変更点がいくつかある。まず，《自己の態度に関する記述》という大項目を新設し，自己に対する感情や評価などについての記述や，態度，考え方，願望などを含めた。次に，《知的能力》という大項目を新設し，能力に関する記述をそこに分類するようにした。また，1984年度版の《趣味・好み・関心・判断》という大項目名を《キャセクション》という大項目名にし，宗教，生，死などに関する態度は《超越者》という別の大項目に分類することにした。最後に，《対人関係》という 1984 年度版の大項目を第一次集団に関するものと第二次集団に関するものとに分け，それぞれを《Primary Group》と《Secondary Group》という大項目にまとめた。その他に，《所有》という大項目はほとんど反応がなかったため削除し，過去時制の反応を集めた《過去》という大項目も，分析上あまり意味がないという理由で削除した。以上が 1985 年度版基準書作成のための改正点である。

1983 年度から 1985 年度までの 3 年間データの数を増

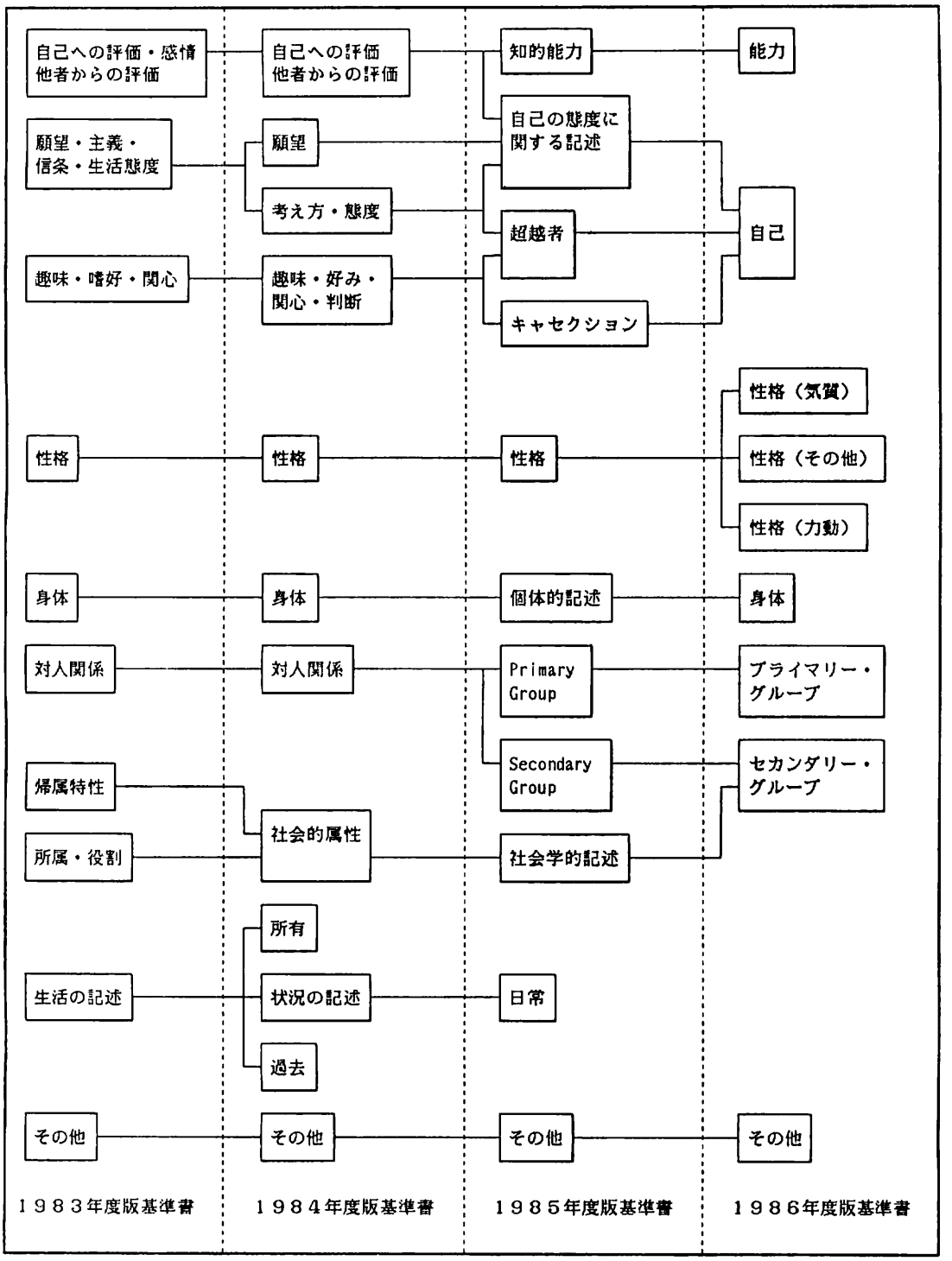

図 1　基準書の大項目の変遷

表 2　パーソナリティの概要（槇田・佐野（1965）より作成）

パーソナリティ				決定要因		
能力的	情意的	指向的	力動的	個体的	環境的	
					家庭的	社会的
評価の客観性等 見通し 知能、精神的分化	性格類型（特性）等 的なもの、すなわち、 面のうち、比較的固定 気質、性格等情意的側	人生観等 生活態度、価値観、 目標、キャセクション、	コンプレックス等 安　定――不安定	容姿、体力、健康等	生活水準等 生育歴とその環境 家族、	交友関係等 社会生活、

やす一方で，基準書の作成，基準書によるデータの分類評価，そして分析結果に基づく基準書の見直しという作業を繰り返して，基準書の改訂を帰納的に行なってきた。その結果，ほぼ安定したカテゴリーが各小項目として得られた。一方，1985年度版の基準書の大項目と表2に示された槇田・佐野（1965）のパーソナリティの概要のシェマとの間に類似性があることも確認された。このシェマは，パーソナリティ診断を行なう際の基本的な枠組みとなるものであり，広く人間を捉えるうえで有効なものと言える。このシェマと，WAI 技法によって得られた self-image の反応カテゴリーとの類似は，self-image が狭義のパーソナリティだけでなく，決定要因をも含む広い領域にわたるものであることを示している。

そこで 1986 年度版の基準書においては，このシェマを参考にして大項目の再編成を行ない，そこに 1985 年度までに得られた小項目を配置することにした。シェマの能力的側面にあたるのは，1985 年度版の《知的能力》なので，これを《能力》という大項目名とした。《性格》は主に情意的側面にあたるが，シェマの力動的側面にあたるものも含まれている。しかし，この時点までに精神医学的性格類型の気質（S，Z，E）を表す小項目や力動的側面を表す小項目は，《性格》の中でそれぞれ集められていた。そこで《性格》という大項目を《性格(気質)》，《性格（力動)》，《性格（その他)》の 3 つの大項目に分割することにした。指向的側面については，それに対応する《自己の態度に関する記述》，《超越者》，《キャセクション》の 3 つの大項目を統合し，《自己》という大項目とした。個体的要因は《個体的記述》が対応しているが，大項目名をわかりやすくするため《身体》と変えた。環境的要因については，家庭的なものは《Primary Group》，社会的なものは《Secondary Group》がそれぞれ対応しているが，さらに《社会学的記述》も社会的な決定要因にあたるので，《Secondary Group》に併合した。但し，《日常》という大項目は，他の大項目と比

表 3　1986年度版基準書の概要

	大項目名	内　　容	小項目数
1	能力	知的能力，専門的能力，対人的能力などについての記述。	8
2	性格（気質）	自分の性格についての記述のうち，精神医学的性格類型の気質（S，Z，E）を表すもの。	75
3	性格(その他)	性格(気質)，性格(力動)以外の自分の性格についての記述。	47
4	自己	自己に対する感情・評価などについての記述。 欲求，願望，希望などについての記述。 態度，キャセクションなどについての記述。	84
5	性格（力動）	自分の性格についての記述のうち，力動的側面を表すもの。	43
6	身体	容姿・体格，健康・体質，身体機能・身体的能力についての記述。	3
7	プライマリー・グループ	血縁的役割，家族，家庭についての記述。	12
8	セカンダリー・グループ	名前，性別，年齢，現住所，出身地，生年月日，職業，所属団体，学歴などについての記述。友人関係，対人関係についての記述。	28
9	その他	評価できないもの，無効回答など。	7
		計	307

べると統合がとれておらず，シェマとも対応しないので，小項目ごとに他のいずれかの大項目に含めることとした。以上のような手続きを経て 1986 年度版基準書が完成された。その概要を表3に示す。なお小項目数の合計は 307 である。

この 1986 年度版基準書は，データの内容分析の結果に基づいてつくられた 1983 年度版基準書を，データの分類評価と分析の結果を考慮して3回にわたって改訂して作成されたものである。その意味でも，カテゴリーの完成度は高いものと言えるだろう。

§4. WAI 反応の傾向

前節に示された手続きによって作成された 1986 年度版基準書を用いて，WAI 反応の分析を行なった。分析されたデータは，1986年度までに収集された有効データ 2145ケースである。被験者の詳細な内訳を表4に示す。この表に示されているように，被験者は小学生から会社員，主婦に至るまで多岐にわたっている。

データはトレーニングを受けた大学生 14 人によって分類評価された。分類評価された被験者全体の反応は 42059 反応で，被験者一人あたりの平均反応数は 19.6 で

表 4　被験者の属性別内訳

職業＼年齢	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～	計
小学生	19 16 35	— — —	— — —	— — —	— — —	— — —	19 16 35
中学生	1 7 8	— — —	— — —	— — —	— — —	— — —	1 7 8
高校生	218 388 606	1 1 2	— — —	— — —	— 1 1	— — —	219 390 609
大学生	15 155 170	138 169 307	— 1 1	— — —	— — —	— — —	153 325 478
その他学生	2 6 8	3 5 8	1 — 1	— — —	— — —	— — —	6 11 17
会社員	— 4 4	323 73 396	112 15 127	115 22 137	7 — 7	— — —	557 114 671
公務員	— — —	1 1 2	1 3 4	— 11 11	— 2 2	— — —	2 17 19
自営業	— — —	2 5 7	1 9 10	— 9 9	— 1 1	— — —	3 24 27
主婦	— — —	— 13 13	— 47 47	— 67 67	— 38 38	— 2 2	— 167 167
その他	1 5 6	20 27 47	17 12 29	8 19 27	— 3 3	— 2 2	46 68 114
計	256 581 837	488 294 782	132 87 219	123 128 251	7 45 52	— 4 4	1006 1139 2145

* 各セルの上段は男性の人数，中段は女性の人数，下段は合計を示す。

あった。各大項目ごとの平均反応数を被験者の属性別に表5に示す。

被験者全体の反応傾向は，《自己》の反応数が 6.5 でもっとも多く，次に《セカンダリー・グループ》の 4.0

表 5　被験者の属性別の大項目平均反応数と標準偏差

被験者の属性＼大項目名		能力	性格（気質）	性格（その他）	自己	性格（力動）	身体	プライマリー・グループ	セカンダリー・グループ	その他	反応数
全体	N＝2145	0.3 0.6	2.6 2.6	1.0 1.2	6.5 3.9	1.6 2.0	1.1 1.4	1.2 1.5	4.0 3.2	1.2 2.5	19.6 1.9
男性	N＝1006	0.3 0.7	2.7 2.6	1.1 1.3	6.1 3.6	1.5 1.9	1.1 1.4	1.1 1.4	4.2 3.3	1.4 2.8	19.5 2.3
女性	N＝1139	0.2 0.5	2.6 2.5	1.0 1.2	6.8 4.1	1.8 2.2	1.1 1.4	1.4 1.7	3.9 3.0	1.0 2.1	19.7 1.5
10～19才	(男性) N＝ 256	0.3 0.7	2.0 2.4	1.1 1.6	5.5 3.9	1.2 1.9	1.0 1.4	0.8 1.2	4.7 3.7	2.4 3.5	18.9 3.4
	(女性) N＝ 581	0.2 0.5	2.2 2.4	0.9 1.2	6.9 4.3	1.9 2.3	1.1 1.4	1.0 1.2	4.1 3.1	1.2 2.5	19.6 1.7
20～29才	(男性) N＝ 488	0.3 0.6	2.7 2.5	1.0 1.2	6.6 3.7	1.6 2.0	1.1 1.4	0.7 1.0	4.2 3.3	1.2 2.6	19.6 1.8
	(女性) N＝ 294	0.2 0.4	3.0 2.5	1.0 1.1	6.4 3.5	2.1 2.1	1.0 1.4	1.0 1.2	4.1 3.0	1.0 2.0	19.8 1.4
30～39才	(男性) N＝ 132	0.4 0.7	3.1 2.5	1.2 1.1	6.2 3.1	1.6 1.7	1.1 1.3	2.0 1.7	3.7 2.8	0.7 2.1	19.8 1.5
	(女性) N＝ 87	0.3 0.7	3.0 2.7	1.2 1.2	6.5 3.9	1.5 1.8	1.2 1.6	2.3 2.3	3.1 2.7	0.7 1.5	19.9 0.5
40～49才	(男性) N＝ 123	0.3 0.8	3.7 3.1	1.1 1.3	5.5 2.8	1.2 1.4	1.3 1.4	2.3 1.8	3.7 2.8	0.6 2.4	19.7 1.6
	(女性) N＝ 128	0.3 0.6	2.9 2.5	0.9 1.1	7.5 4.2	1.2 1.9	1.0 1.5	2.6 2.0	3.1 2.7	0.4 1.2	19.9 0.7
高校生	(男性) N＝ 219	0.4 0.8	2.1 2.4	1.1 1.6	5.2 3.7	1.3 1.9	1.0 1.4	0.8 1.3	4.9 3.8	2.4 3.6	19.3 3.0
	(女性) N＝ 390	0.3 0.6	1.7 2.0	0.8 1.2	7.6 4.6	1.5 2.2	1.2 1.4	0.9 1.2	4.1 3.2	1.4 2.8	19.5 1.9
大学生	(男性) N＝ 153	0.4 0.7	2.8 2.7	1.1 1.4	6.4 3.9	2.0 2.3	0.9 1.4	0.4 0.7	3.4 3.0	2.2 3.6	19.5 2.3
	(女性) N＝ 325	0.1 0.4	3.3 2.7	1.1 1.2	5.9 3.4	2.6 2.3	1.0 1.3	0.9 1.1	4.1 2.8	0.9 1.6	19.9 0.5
会社員	(男性) N＝ 557	0.3 0.6	3.0 2.6	1.1 1.2	6.1 3.3	1.5 1.7	1.2 1.3	1.4 1.5	4.3 3.2	0.8 2.1	19.6 1.9
	(女性) N＝ 114	0.2 0.5	3.1 2.7	1.1 1.3	6.0 3.6	1.9 2.0	1.0 1.5	1.4 1.8	3.9 3.1	0.9 2.3	19.6 2.1
主婦	N＝ 167	0.3 0.6	2.8 2.5	0.8 1.1	7.3 3.8	1.1 1.7	1.2 1.6	3.0 2.1	2.9 2.4	0.5 1.3	19.9 0.6

＊ 各セルの上段は平均反応数，下段は標準偏差を示す。

が続く。しかし，自分の性格についての記述のカテゴリーである《性格（気質)》,《性格（その他)》,《性格（力動)》の3つを合わせると5.2となり，《セカンダリー・グループ》を上回る。さらに《自己》と性格についての3項目を合わせた場合，全反応の約 60% を占めることになる。一方,《能力》は 0.3 と非常に少なく，能力的側面についての記述が WAI 反応にはあまりないことがわかる。

小項目ごとの反応を分析すると，全ての小項目の中でもっとも反応数の多かったものは，大項目《自己》の中の〈好み〉であった。被験者全体での〈好み〉の反応数は 2459 で，このカテゴリーに1回以上反応した被験者は 1172 人であった。その他に反応の多かった小項目としては，《セカンダリー・グループ》の〈学校に関する記述〉(反応数1280),《自己》の〈生活習慣(生活態度)〉(反応数 1271),《セカンダリー・グループ》の〈職場・職業に関する記述〉(反応数 1226),《プライマリー・グループ》の〈血縁的役割〉(反応数 1180),《身体》の〈身体に関する記述（容姿・体格)〉(反応数 1169) などであった。性格に関する記述の中では,《性格（気質)》の〈明るい・明朗・陽気〉,《性格（力動)》の〈気が弱い・気が小さい〉や〈自分勝手〉などの小項目の反応が多かった。しかし，この中でもっとも反応の多かった〈明るい・明朗・陽気〉でも反応数は 432 にとどまり，性格についての記述は他の大項目に比べ反応が多数の小項目に分散している傾向がある。

次に性別による WAI 反応の違いを見ることにする。表5に示されたように，もっとも大きな差が認められる大項目は《自己》である。男性の平均6.1に対し，女性の平均は 6.8 である。これは主に，小項目の〈好み〉の反応数の違いによるもので，〈好み〉の男性一人あたりの反応数は 0.86 だが，女性の反応数は 1.40 である。《プライマリー・グループ》と《セカンダリー・グループ》は，男女によって反応傾向が違っている。《セカンダリー・グループ》では男性の反応数の方が多いが，《プライマリー・グループ》では女性の反応数の方が多い。これは男性が女性よりも社会生活を重視していて，女性が男性よりも家庭生活を重視していると解釈することもできるだろう。また，《セカンダリー・グループ》の小項目，〈性別〉の反応が，男性よりも女性に多いことは，男女の性的同一性の違いを示しているものと考えられる。

年齢による違いを見ると，《プライマリー・グループ》と《セカンダリー・グループ》において，20代以下と30代以上との間に大きな差が認められる。図2からもわかるように，各世代の中では前述の性差が現れているが，20代以下では，《プライマリー・グループ》の反応数が 0.7 から 1.0 であるのに対し，30代以上は 2.0 から 2.6 と2倍以上の反応をしている。逆に《セカンダリー・グループ》では，20代以下が 4.1 から 4.7 の反応数があるのに対し，30代以上は 3.1 から 3.7 と 20代以下よりも少なくなっている。これは，30代以上の自分の家庭を持った世代と，未婚で友人関係などの方を重視する世代との違いではないかと思われる。《性格（気質)》については10代の反応が少ない。これは，この大項目が性格の気質的なものについてのカテゴリーであるため，ある程度自己を客観的に見て，それを self-image の中に取り込むことができる年齢にならないと多くの反応が出ないためと考えられる。

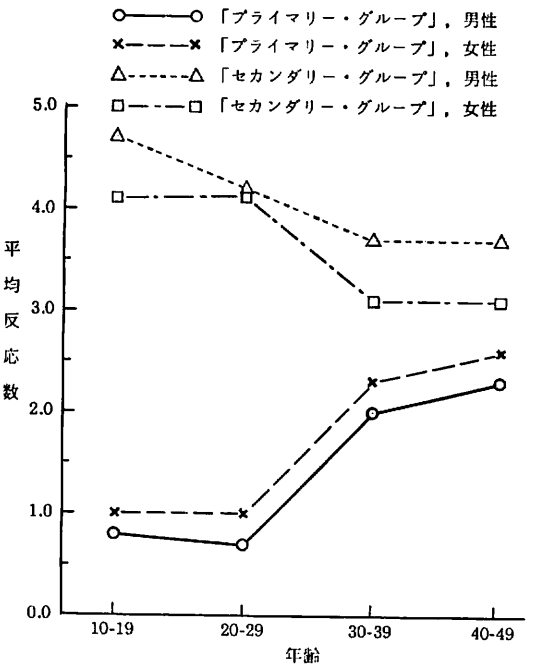

図 2　年齢別に見た「プライマリー・グループ」と「セカンダリー・グループ」の平均反応数

《自己》については，10代と 40代において大きな性差が認められる。10代と40代の男性はいづれも《自己》の反応数は 5.5 であるのに，10代の女性は 6.9，40代の女性は 7.5 と非常に多くの反応をしている。《自己》反応数を世代を追ってみて見ると，図3のように女性はU字形の曲線を描いているが，男性は逆U字形の曲線になっている。なぜこのようなことが起こるのか，はっきり

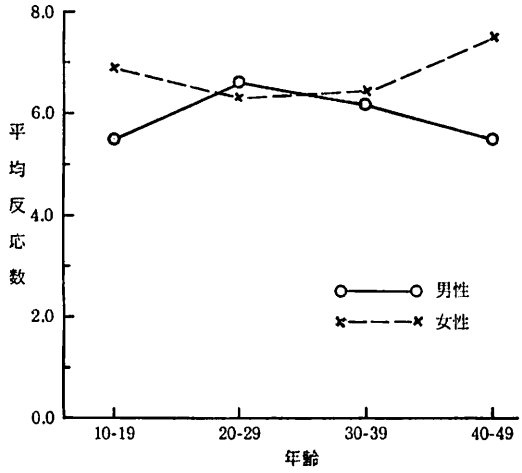

図 3 年齢別に見た「自己」の平均反応数

した理由はわからないが，《自己》の反応数は性差と年齢の両者の影響を受けていることは明らかである。その他に，10 代と 20 代の女性の《性格（力動)》の反応数が特に多いという傾向もある。

最後に社会属性による違いを，サンプル数の多かった高校生，大学生，会社員，主婦とに分けて分析することにする。性差や年齢差による結果と重なる部分もあるが，《プライマリー・グループ》と《セカンダリー・グループ》については年齢差で見るよりも結果がはっきりしている。主婦では，《プライマリー・グループ》の反応数が 3.0 であるのに対し，《セカンダリー・グループ》は 2.9 となっていて，《プライマリー・グループ》の反応数が《セカンダリー・グループ》の反応数をわずかに上回っている。これは，主婦にとって家族や家庭が大きな意味を持つことを示していると言えるだろう。これに対し，男子大学生は《プライマリー・グループ》の反応数が 0.4 で，家族や家庭についての記述がほとんどない。

《セカンダリー・グループ》については，男子高校生が 4.9 でもっとも多い。この大項目の中で男子高校生に反応が多い小項目を見ると，〈学校に関する記述〉，〈名前〉，〈住所〉，〈性別〉，〈所属団体・サークル〉という順になっている。これは，学校やサークルが男子高校生にとって大きな意味を持つことをあらわす一方で，住所，名前，性別などのデモグラフィックな属性で自己を捉える傾向が強いことも示している。女子高校生についても類似した傾向が認められるが，〈性別〉が〈学校についての記述〉についで 2 番目に反応の多いカテゴリーとなっている。これは男女の比較において確認された傾向と一致しており，高校生においても性的同一性の違いがあることが示されたことになる。

《自己》についても年齢による違いと似た結果が得られているが，女子高校生の反応数は 7.6 と主婦の 7.3 よりも多くなっている。この大項目の中で女子高校生に反応の多い小項目は〈好み〉である。女子高校生のこの小項目の一人あたりの反応数は 1.85 で，主婦の 1.13 を大きく上回っている。しかし，主婦の場合には，〈好み〉と同程度に〈生活習慣(生活態度)〉という小項目の反応があり，女子高校生とは反応が質的に異なることを示唆している。

以上のように，WAI にあらわれた self-image は，全体的傾向として，〈好み〉を中心とする指向的側面を記述したものが多い。その他には，性格についての記述や社会生活に関する記述が多いが，家族や身体に関わる記述もかなりの頻度で認められる。一方，パーソナリティの能力的側面についての記述は非常に少ないという傾向がある。性差や年齢差がよくあらわれているのは，大項目の《自己》，《プライマリー・グループ》，《セカンダリー・グループ》などである。特に，《プライマリー・グループ》，《セカンダリー・グループ》の反応数の性差，年齢差は，自己にとっての家族や社会的な役割，地位，対人関係の重要さの違いや，自己の把握の仕方の違いを示していると言えるだろう。

§5. おわりに

以上述べてきたように，本研究では，WAI 技法を用いて self-image を収集し，その内容分析の結果に基づき，WAI 反応の分類カテゴリーを作成した。4 年間の研究成果である 1986 年度版基準書は，10 個の大項目と 307 個の小項目をもっている。307 個の小項目は，内容分析の結果から経験的に導き出されたもので，これを用いて WAI 反応をほぼ分類できることが確認された。これら小項目の中には，既存の自我・自己理論から見れば自己とは言えないものや重要とは言えないものが含まれているかも知れない。しかし，各小項目はそれぞれ自己の側面をあらわしている。なぜならば，これらのカテゴリーは「私は誰でしょう？」という問いに対する被験者の回答から作成されており，被験者にとっては紛れもない自己と言わざるを得ないからである。特に興味深い事実は，これらのカテゴリーが槇田・佐野のパーソナリティの概要のシェマに包括されたということである。すなわち，決定要因をも含めたパーソナリティ全体が self-image に反映され得るということが示されたことにな

る。このようなことも，カテゴリーを経験的に導出することによって得られた成果と言えるだろう。

本稿では紙面の都合もあり，大項目ごとの反応数についての分析結果を中心に述べた。しかし，小項目単位の分析が有効であることも，今回の分析において示されている。例えば，高校生が《セカンダリー・グループ》の中で多く反応する小項目から，彼らが自己をどのように捉えているかを理解することができた。このように，小項目に焦点をあてた分析を行なえば，より生き生きした self-image を捉えることができる。また，小項目単位の分析については様々な方法が考えられ，これからの発展が期待できる。

今回収集されたデータには，小・中学生や50才以上の被験者のものが少なかった。そのため，分析も高校生，大学生，会社員，主婦などのデータを中心に行なわれた。しかし，不足しているデータの収集を行なえば，より多様な分析ができるようになる。特に，自我・自己の発達的視点からの分析は，今後の重要な課題である。そして，このような分析結果が多く蓄積されれば，WAI 技法をパーソナリティ把握に用いる際の，貴重な基礎資料となるだろう。

参考文献

Bugental, J. F. T., & Zelen, S. L. 1950 Investigation into 'Self-Concept' I. The W-A-Y Technique. *Journal of Personality*, 18, 483–498.

Gordon, C. 1968 Self-Conceptions: Configurations of Content. In C. Gordon, & K. J. Gergen (eds.) *The Self in Social Interaction*, pp. 115–136, New York: Wiley.

弘田直人・槇田 仁・西村麻由美・岩熊史朗 1985 WAI を用いた Self Image の研究—II. WAI 反応の一般的傾向について—，日本心理学会第49回大会発表論文集，692.

James, W. 1892 *Psychology: Briefer Course.* New York: Holt. (今田恵訳 1939「心理学」岩波文庫)

川喜多二郎 1967 発想法 中公新書

Kuhn, M. H., & McPartland, T. S. 1954 An Empirical investigation of Self-Attitudes. *American Sociological Review*, 19, 68–76.

槇田ゼミナール第14期生 1984 WAI を用いた Self-Image の研究，昭和58年度慶応義塾大学文学部卒業論文（未刊行）

槇田ゼミナール第15期生 1985 WAI を用いた Self-Image の研究II，昭和59年度慶応義塾大学文学部卒業論文（未刊行）

槇田ゼミナール第16期生 1986 WAI を用いた Self-Image の研究III，昭和60年度慶応義塾大学文学部卒業論文（未刊行）

槇田ゼミナール第17期生 1987 WAI を用いた Self-Image の研究IV，昭和61年度慶応義塾大学文学部卒業論文（未刊行）

槇田 仁・佐野勝男 1965 Dosefu-Test 基本生活領域の診断—テスト解説— 金子書房

McGuire, W. J., & Padwer-Singer, A. 1976 Trait Salience in the Spontaneous Self-Concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, 33, 6, 743–754.

McLaughlin, B. 1966 The WAI Dictionary and Self-Percieved Identity in College Students. In P. J. Stone, D. C. Dunphy, M. S. Smith, & D. M. Ogilivie (eds.), *The General Inquirer: A Computer Approach to Content Analysis*, pp. 548–566, Cambridge, Mass.: M. I. T. Press.

西村麻由美・槇田 仁・弘田直人・岩熊史朗 1985 WAI を用いた Self Image の研究—I. 分類カテゴリーの作成—，日本心理学会第49回大会発表論文集，691.